

発達障害も愛着障害もこじらせない もつれをほどくアプローチ

村上伸治著

日本評論社, A5判 264頁, 2,970円, 2025年6月刊

(駒木野病院) 岩垂喜貴

本書『発達障害も愛着障害もこじらせない』は、著者がこれまでに発表してきた著作を集め、三部構成・全22章にまとめたものである。「発達障害をこじらせない」「愛着障害・トラウマの延焼を防ぐ」「もつれをほどく精神療法」の三部は、それぞれが発達障害と愛着障害、そして両者が絡み合う臨床の現場を深く照らし出している。発達障害臨床において著者が訴えるのは、「グレーゾーン（発達障害特性をある程度もっている人々）を放置しない」という姿勢だ。支援が必要かどうか判断に迷う「グレーゾーン」こそ、後に深刻な「こじれ」を生む源泉であり、早期に支援を導入することで事態の複雑化を防ぎ得ると説く。著者は臨床現場に現れるASD者の多くが「ASD特性+こじれ（トラウマ累積）」であると理解し、こじれが生じると成長は停滞し、適切な支援が入ることで再び成長が動き出すと述べる。この視点は、発達障害を固定的な障害像としてではなく、成長のプロセスにおける動態的な現象として捉える姿勢を示している。

「こじらせる」という他動詞を用いて、外部からの介入や誤った対応が事態を混乱させる危険を強調する点は印象深い。発達障害臨床の場では、医療や福祉のみならず保護者の対応も複雑に絡み、混沌化する症例は少なくない。だからこそ精神科臨床においては「これ以上悪化させない」「余計なことをしない」という繊細かつ慎重な態度が極めて重要なだろう。

本書の特徴の一つは、著者の比喩やたとえ話の巧みさである。たとえば「トラウマの延焼」という表現や、それを視覚的に示した図は読者に強い印象を残す。抽象概念の理解が難しい発達障害の当事者にとっても、比喩は具体的な手がかりとなり、症状の理解や治療者との共通言語を形づくる。さらに、当事者にとって自身の症状が別の視点から語られるこ

とは、新しい意味づけを可能にし、治療的な気づきを促す契機となる。

また本書には、通常の専門書では触れられにくい臨床的エッセンスが数多く盛り込まれている。たとえば「弟子入り精神療法」と呼ばれるASD者のこだわりの世界に入り込む方法や、「人のものを盗ってしまう」子どもへのソフトな行動療法的アプローチ、保護者への具体的な声かけの工夫など、日々の臨床に直結する知恵が豊富に紹介される。診断のゼロ百思考や不登校診療における起立性調節障害の立ち位置など、臨床家としての率直な実感が語られる点は賛否を呼びつつも、現場感覚を持つ読者には深い共感を呼ぶだろう。

さらに、愛着障害やトラウマへの視座も鮮烈である。「トラウマ体験を本人が話す時は傾聴するが、直接扱わず日常生活の苦しさを和らげることを主眼とする」という治療姿勢は、トラウマを抱える発達障害臨床において重要な示唆を与える。第12～14章に示される症例やその考察には特に説得力があり、本人の体験に沿ったトラウマ心理教育の重要性を実感させる。

本書は単なる発達障害臨床の実践書にとどまらず、精神科臨床全般に応用可能な示唆に満ちている。豊富な面接例と著者独自の比喩に裏付けられた語り口は、読者に理論以上の「臨床感覚」を伝えてくれる。発達障害や愛着障害に関わる支援者はもちろん、精神療法に携わる臨床家すべてに手に取ってほしい一冊である。